

規律正しいアメリカの生徒 アメリカの学校再生を見る

生徒規律

生徒による銃乱射事件や薬物乱用などがセンセーショナルに日本のメディアで報道されることもあって、アメリカの学校の生徒規律は相当に乱れているのではないかと多くの人は思っているかもしれない。しかし、私はここ 30 年来いくたびものアメリカの各州の学校を訪問して感じることは、1990 年代になって以来、アメリカの生徒規律は、「きわめて規律正しい」ということである。授業中は静かで、お喋りをしたり席を立ったり、また遅刻をする生徒はいない。先生の指導に素直に従って授業を受け、教室移動の際には、列をつくって廊下を整然と黙々として移動する。教師に暴言を吐いたり、ましてや反抗したりするような生徒はいない。このような授業風景は私の個人的な感想ではなく、各種の教育レポートでも同様な報告がなされている。

現在のアメリカの学校は、明るく自由でのびのびとした雰囲気である。そして、生徒と教師の目は、生き生きと輝いていて、すがすがしい。

I 学校に見る規律と規則

学校規律の実情について、ウエストブルームフィールド学校区の場合を見てみる。ウエストブルームフィールドは、ミシガン州のデトロイト市に隣接する比較的住宅環境のよい住宅地区である。現在のアメリカの学制(p. 21 参照)は、小学校はK-5年(幼稚園-小学校5年)、中学校は6-8年、高等学校は9-12年が普通である。しかしこの学校区は、小学校が2つに分けられ、K-1年、2-5年で、中学・高校は普通の学制であった。このようにアメリカの学制は、建物の状況など主として経済的効率性の理由で、学制を変更することはしばしばある。

1. 国旗に忠誠を誓って始まる授業-グレチコ小学校

グレチコ小学校は、K-1年の2学年制である。この小学校は、朝8時30分が始業時間である。幼稚園の教室に入り、授業を見学する。授業開始のチャイムが鳴ると、クラス担任の女性教師が、アメリカ国旗を代表の園児に渡す。1クラス19名の幼稚園児がその国旗を中心にして、その周りにひざまずいて国旗を囲む。それから、「国旗に対する忠誠の誓い」を、全員で黄色い声を張り上げて唱和する。



国旗に忠誠を誓うボード

「私は、アメリカ合衆国の国旗のもとに、すべての人に対して自由と公正さをもって、神のもとに1つの国家として、不可分なものとして存在している共和国のために、忠誠を誓います」と。

かなり難しい文章ではあるが、幼稚園児が全員で間違いなく唱和する。

この国旗に対する忠誠の誓いは、形は変わっても、小学校・中学校・高等学校のどこでも行われるアメリカの学校の光景である。自由と民主主義を根幹とする正しい国家観と国民意識を高揚させてから、毎日の授業を始めるのである。

アメリカの学校では、どこの教室をのぞいても壁面いっぱいを利用して、道徳的徳目やクラス規則・注意事項などが、所狭しと貼ってある。この

名古屋大学岡崎高等師範学校物理科卒業。名古屋大学教育学部附属中・高等学校教諭、同大学教育学部講師を経て、昭和43年愛知県立高等学校教諭から教頭・校長を歴任。昭和48年イーストウエストセンター留学。昭和62年中京女子大学教授となり、現在同大学名誉教授。過去30年間にわたりアメリカの幼稚園から高校までを200校以上を訪問して、学校の実態を調査研究した。1970年代のアメリカの学校崩壊の状態から、今日に至るまでの教育の再生過程を発表し、我が国の生徒規律の取り組みに大きな影響を与えている。著書に『アメリカ教育のルネッサンス』（学事出版）、『グラフで見るアメリカ社会の現実（訳）』（学文社）、『アメリカの事例から学ぶ学校再生の決めて』（学事出版）など多数。



揭示こそは、そのクラスの担任教師の規律指導の具体的な方針を明確にしているのである。このグレチコ小学校の幼稚園の教室の揭示の2つの例を示す。

(1) 学習勝利者のための10の情報

- | | |
|---------------------|----------------------|
| ① 宿題をやりなさい。 | ② よい聞き手になりなさい。 |
| ③ 真面目になりなさい。 | ④ よい選択をしなさい。 |
| ⑤ 貴方にとって最良の勉強をしなさい。 | ⑥ 他人に親切にし、他人を尊敬しなさい。 |
| ⑦ よい市民になりなさい。 | ⑧ 責任をとりなさい。 |
| ⑨ よきスポーツマンになりなさい。 | ⑩ 違った方法も試みなさい。 |

(2) 立派な生徒（スターチューデント）

クラス19人の顔写真の一覧が貼っており、その上に赤い^{スター}星印の生徒（7人）、青い星印の生徒（7人）、星印のない生徒（2人）、イエローカードが添付された生徒（2人）の一覧が貼り出してある。これを見れば、各生徒の態度・行状の累積結果が一目瞭然と分かる。アメリカでは、このように幼稚園児のときから学習の勝利者になるように、また、自己規律がしっかりできるように、個人個人の行動態度評価をオープンに揭示し、自己責任と正しい競争心を鼓舞して、学習と規律の指導をしっかり行っている。

2. 規律と規則—スコッチ小学校

スコッチ小学校は、2—5年制である。この学校の3年生の授業を見る。授業は、きわめて規律正しく行われていた。所狭しと添付されている揭示物などから、このクラスの女性教師の積極的な指導姿勢がよく分かる。その揭示物4つを以下に示す。

(1) 重要なこと—生徒が規則を破ったとき（担任教師の手書き）

- ① 1度目；記録カードにチェック
- ② 2度目；2度目のチェック
- ③ 3度目；規則違反用紙に記録され、父母の署名をもらう。
金曜日のラップアップ会（楽しい会）に出られない。
- ④ 4度目；4度目のチェックで、父母呼び出し
- ⑤ 5度目；ディテンション（先生と一緒にランチをとるなど）や父母面接が行われる。

(2) 休憩時間教室内規則（雨天時のみ；晴天時は全員屋外に出る）

- ① 本を読むか、静かにゲームをする。
- ② 床の上でのびをするか、座っている。
- ③ 室内用話し声（小さい声）で話す。
- ④ セイフティーズ（5年生の安全監視員が下級生のクラスに配属されている）に従う。

(3) クラス規則（担任手書き）

- ① 手を挙げる前に話してはいけない。
- ② 他人の特性を尊重しなさい。
- ③ 常に真実を話しなさい。
- ④ 君自身と学校のために責任を持ちなさい。
- ⑤ 人のいやがることをしてはいけない。 ⑥ 他人のためによい模範となりなさい。

(4) グリーンカード（行動評価表）

生徒各自にグリーンカードが渡され、先生に褒められたり注意を受けたときは、このカードに記録する。先生は、金曜日に生徒個人のグリーンカードを検査する。これによって、先生はその週の各生徒の行動の○×の集計に基づいて行動評価を数段階に分けて評価する。これをシティズンシップグレード（市民道徳性評価）として、グリーンカードに記録する。そして、1クラス21人のグリーンカード一覧表が作られ、掲示される。これを見れば、どの生徒がよい行動をしたか、悪い行動をしたかが一目瞭然である。これを毎週集計し、1年間の行動評価を一覧表にしてオープンに掲示してある。生徒はみんな「よい子」になろうと、学習に規律に一生懸命に努力するのである。

3. 尊敬と自律—アボット中学校

アボット中学校（6－8年制）の玄関に入る。正面に3 R's；「Respect Yourself, Respect Others, Respect Your School（自分自身を尊重せよ，他人を尊敬せよ，学校を尊敬せよ）」が大きく掲げられてある。この3 R'sは、現在のアメリカの多くの学校に掲げられていて、アメリカの学校共通の教育標語のようでもある。この‘レスペクト（Respect）’は、‘尊敬・敬意・自重・自制・自尊心’など広い意味を持つ重要な教育徳目用語となっていて、学校教育における生徒指導上の重要なキーワードとなっている。

このアボット中学校では、生徒自身が自重して行動し、自尊心をもって悪い行動に走らず、他人を尊敬し、教師に敬意を払い尊敬の念をもち、学校に誇りをもち、学校の権威に服す、という教育観のもとに教育が行われている。

この中学校においては、問題生徒を発見した教師は、教師自らが責任を持って、直ちに指導措置を行う。この指導措置を「生徒差し向け（Student Referral）」カード（指導カード）に記入し、管理職に提出する。管理職は、生徒を呼び出し、事実確認の後、改めて指導し、最終的な処罰を決定する。



給食時など廊下を移動するときは、無言で整列する。

Ⅱ 生徒規律の指導態勢

1. 校則

アメリカの生徒指導態勢は、体系的に厳然と確立されている。その根本となるものは、地区教育委員会が示す「生徒行動綱領 (student conduct code)」である。ここには、教育指導目標と方針、行動態度、通学、図書館、ランチ、学校財産、学習態度、怠学、服装、所持物などに関わる生徒行動綱領が細かく規定されている。これらに違反した場合のディシプリン (discipline 罰則規定) も明記されている。それは5段階程度になっているのが普通である。

第1段階…注意、父母召還

第2段階…ディテンション (校長先生とランチをとる、居残り、土曜出校など)

第3段階…サスペンション (停学) またはオルタナティブスクール送り

第4段階…オルタナティブスクール送り

第5段階…放校

この地区教育委員会の生徒行動綱領に基づいて、各学校は、学校の実情に合わせて、さらに細かく「校則」を規定している。この校則は「生徒ハンドブック」として、入学時に生徒・父母に渡される。生徒・父母は受領書に署名して学校に提出する。これが、学校と生徒・父母との契約であり、またオリエンテーションにもなっているのである。

この生徒ハンドブックは、高等学校においてはA4版で50ページ、中学校においては40ページ、小学校においては10ページ程度のものが普通で、学習面・規律面の事項について、こと細かく校則が示されている。



マーチンルーサーキング高校の登校風景 デトロイトのダウンタウンにあるこの高校の生徒は、黒人だけである。生徒は、始業前、学校玄関の金属探知器の前で整列して待っている。ナイフや銃など危険物の所持品検査を受けてから教室に入る。

2. 学校における生徒指導態勢

(1) 一般教師

小学校においてはクラス担任が、中学や高校においては各教科担任教師が、生徒の規律指導の第一線に当たる。各教師は、校則に加えて、授業を行うためのクラス規則や授業規則を作り、これらを学年の授業はじめに、それぞれの教師が独自に生徒に明示する。これらの校則や規則に違反した生徒に対しては、直ちに指導措置がとられる。ディシプリンの第1、第2段階程度までは、各教師が責任を持って指導措置を行い、生徒指導カードに記入し、これを教頭に提出する。指導に従わない生徒、指導困難な生徒、および第3段階以上の指導措置に対しては、教頭やカウンセラーに送致し、指導措置のすべてを委任する。

(2) 校長・教頭

校長は、各教師の生徒指導を指示・監督し、常時校内を巡視する。生徒指導の最終的な責任を持つ。教頭は、ディシプリンの第1責任者で、問題生徒の指導およびその指導措置を行う。

(3) カウンセラー（学校カウンセラー）

中学・高校における1人のカウンセラーには、生徒氏名のアルファベット順に、300人くらいが割り当てられる。カウンセラーの主たる職責は、生徒の進路・科目選択や学校生活の指示・相談・援助である。また、問題生徒の立ち直りのために教頭の指導に協力する。

(4) ハウスシステム

最近の傾向であるが、生徒100人程度を主要教科（英語・数学・理科・社会）の4教科の担当教師がハウス（グループ）を組織し、学習指導と規律指導を責任をもって指導する。ハウス会議には、カウンセラーも出席する。

3. 学校の安全管理体制

(1) セキュリティオフィサー、警察官

現在のアメリカにおいては、中学校・高等学校において、セキュリティオフィサー（学校安全管理官）が校内を巡視したり、ディテンション生徒の監督をしたりして、学校キャンパス内の安全管理を行っている。高校においては、警察官が常駐している学校が普通である。常駐していない学校においては、学校と警察との間の直通連絡システムができており、数分以内に警察官が駆けつける体制になっている。

(2) オルタナティブスクール

生徒指導の第一義は、「善良な大多数の生徒のためのよい学習環境」の維持管理においている。したがって、怠学・非行・暴力・いじめ・麻薬・妊娠や教師に暴言を吐いたり反抗したりする生徒は、正規の学校からはずし、オルタナティブ（代替的）な学校に送り、ここで、個別に矯正指導をする。立ち直ることができれば、元の学校に帰す。このようなオルタナティブスクールでは、一般教師のほか、心理カウンセラー・精神科医・警察官・法律家・宗教家など、それぞれの専門的な立場からの指導・助言・協力を得て指導する。

Ⅲ 生徒指導の理念

1. 自由と規則

テネシー州のベイラー学校（私学）の教育方針の冒頭に、「この学校は自由（freedom）



オルタナティブスクール（ジョージア州ロックデール郡） 無断遅刻3回程度でここに送られ、孤立したブースの中で反省する。2、3日で立ち直れば元の学校に帰ることができる。

を奨励する。しかし、自由と放縦（license）とは区別する。自由は、他人の権利や感情に配慮することなしに行動する個人のための完全な自由（liberty）を意味しない。このために定める合理的な制限（limit）や規則（rule）は、すべての者に関わりのある自由を維持していくために必要である」と明記されている。

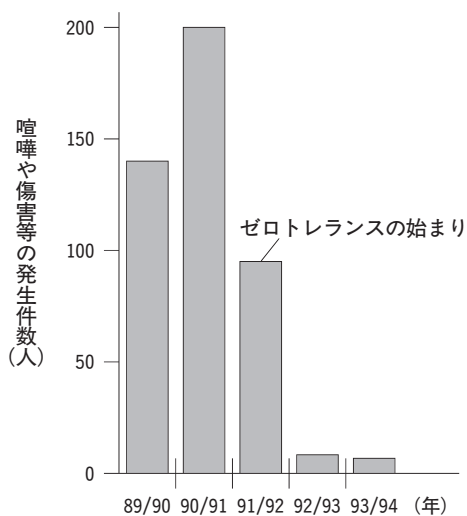
真の自由とは、フリーダムであり、制限や規則が必須で、放縦やリベラル（リバティ）のように、個人中心による自己主張を強調したり、規則の価値を低く見たり、管理されないことなどを強く主張する自由とは、違うことを明確にしている。

将来、自由と民主主義社会の健全な発展を維持していくためには、小学校入学直後から、校則を遵守させ、規則遵守の体験を確実にさせようとするのである。フリーダムの意味する「規則を尊重する」「自己規制をする」「他人を尊敬する」「市民的徳目を身につける」などの指導を重要視する。リバティやリベラルが意味するような「他人に拘束されない」「規則で管理されない」「自主的に勝手に行動する」などは、真の自由ではない。それは罰則の対象になることを教え、体得させようとするのが、アメリカの生徒指導観である。

2. ゼロトレランスとプログレッシブディシプリン

ゼロトレランス（Zero Tolerance）とは、「寛容さなしの指導」ということである。トレランスとは、「寛大さ、寛容さ、忍耐強い」などの意である。したがって、ゼロトレランスとは、寛容さなしの生徒指導方式ということである。アメリカの学校規律が1970年代に崩れ去って、学校には薬物乱用・飲酒・暴力・いじめ・妊娠・学力低下や教師への反抗の諸問題を生じた。その建て直しのための生徒指導上の諸施策が行われてきた。その中で最も実効の上がった方法が、ここ10年くらい前から導入されたゼロトレランス方式であった。

ゼロトレランスの目的は、善良な大多数の生徒の学習環境を守ることである。このゼロトレランス方式の理念・特徴・効果などについては、おおよそ以下のようである。



ヘンリー・ホス高校：暴力とゼロトレランス

このゼロトレランス方式をきめ細かくより効果的にするために、プログレッシブディシプリン (progressive discipline 累積的規律指導) 方式の採用が、最近特に顕著になってきている。非常に細かい規則を作り、小さい規則違反 (しつけ違反など) の段階で、直ちに軽い罰を与える、その時点で改めさせる。度重なればプログレッシブ (累積的) に罰をもう少し重くしていく。このことは、決して大きな規律違反を犯させないようにしようとする指導法である。

例えば、授業中に私語したり席を立ったりした場合には、すぐに注意をし、ごく軽い罰点や罰を与える。指導カードへの記入、座席の変更、教室の後ろや廊下に立たせる、父母召還、軽いディテンションなどの指導を即刻、的確にきめ細かく行う。薬物乱用・暴力行為や教師に対する暴言・反抗などの大きな問題行動を起こすまでには、決して至らせないようにしようとするきめ細かい配慮ある指導法である。

細かい指導を何もしないで、生徒の自主性に任すなどの指導観は、教師の職責放棄に当たるのである。

Ⅳ 学校規律の建て直し

1. アメリカの教育はどうして破綻したか

ジョージ・ブッシュ大統領は、アメリカ教育の建て直しのために、1990年に「国家教育目標」を定め、91年にはその具体策として「アメリカ2000教育戦略」を発表した。このアメリカ2000教育戦略の副題には、「我が国を本来あるべき姿に戻すために」とある。また、この本文の冒頭には、「この戦略は、教育界の疲れ果てたつまらない慣習 (weary practices)、時代遅れの仮説 (outmoded assumption) などからの変革を促すものとなるであろう」とある。

ここには、1970年代から80年代にかけて、アメリカの旧き良き教育を破綻させてしまったのは、まずは「子ども中心主義」による進歩主義教育仮説であり、次いで、実は最も深刻にアメリカ教育を崩壊させてしまったのは、初期のオルタナティブ教育仮説であるとブッシュ大統領は断罪している。このことは、この教育戦略からよく読みとれる。初期のオルタナティブ教

① 合理的な規則を整備する 規則に違反した生徒に対しては、直ちに罰を与える。これは大多数の善良な生徒のよい学習環境を守るために絶対必要である。善良な普通の生徒は、合理的で、適正な規則に対しては何の痛痒も感じないのである。

② 自らの行動に責任を持つ 規則違反行為に対して、必ず罰を与える。それは自らの行動に責任を持つことであり、責任をとるということとは、人間性の証であることを知らしめなければならないからである。このことは、自由と民主主義社会を発展させるための重要な要件でもある。

③ 権威を尊重する 善悪の判断を的確に教え、善に対する権威を尊重し、これに従順に従う態度を育成し、悪を憎み批判する態度を育成する。

アメリカの学制：アメリカの学制は、地区教育委員会が決定するのが基本である。1920年代から進歩主義教育理念によって、6・3・3制が主流になった。小学校（エレメンタリー）6年の後は、高校。高校はジュニアハイとシニアハイとに分かれる。1980年代後半になって、就学前教育の重要性と、ジュニアハイを基礎基本および規律重視の必要性から中学校（ミドル）に変更する傾向になった。現在のアメリカの学制は、小学校6年；エレメンタリースクール（K—5…幼稚園から小学校5年）、中学校3年；ミドルスクール（6—8年）、高校4年；ハイスクール（9—12年）が大勢となっている。

育仮説の発祥は、1960年代のリベラルな社会風潮のもとにおけるヒューマニズムを基調に置く極端な人権主義、および反体制的ムードを基調とする教育革新運動に基づくものであった。その教育仮説は「子どもが悪いのではない。制度が悪いのだ」とするラジカルな改革運動であり、すべての伝統的な制度や規則を排除して、一切の管理体制から生徒を解放すれば、生徒は生き生きと甦るであろう、という仮説である。この教育仮説こそが、真の人間的な教育であるとする全くの非管理的教育が主張された。

この教育革新運動の影響は大きく、70年代、80年代においては、アメリカの公立学校の教師に生徒規律指導に対する混乱を与え、教師の指導意欲を失わせてしまったのである。この結果は、学校崩壊にも似た状況、すなわち、怠学・暴力・いじめ・麻薬乱用・飲酒・喫煙・不登校・妊娠や子持ち生徒、教師への反抗・暴言などの状況を示してしまったのである。この初期のオルタナティブ教育理念は現在ではその価値を否定されて、その言葉だけが残って、その概念と全く違った現在のオルタナティブスクールとなっているのである。

2. アメリカはどのようにして学校規律を建て直したか

このような生徒規律指導の建て直しのためには、「子どもが悪いのではない。制度が悪いのだ」とする教育仮説から脱却して、アメリカの本来あるべき姿の伝統的教育に回帰すべきであるとする方向をとったのである。これが1990年代におけるブッシュ、クリントンの各大統領の教育改革施策である。

(1) ブッシュ大統領の国家教育目標

90年のブッシュ大統領の国家教育目標の目標6は、「安全で、規律ある、麻薬のない学校」である。この目標達成の実践例として、シカゴのビューマ小学校シルビア・ピーターズ校長の指導の在り方を推奨している。その指導法とは、次の彼女の言葉からその大要が推測できよう。

「私は、ことあるごとにいつでもナイフと麻薬を子どもたちから回収した。ある日、私は階段に立って不良仲間たちに言った。“私を殺してから学校に入りなさい”……校内はすべて正常化された。この学校の暴力発生率は最低になった。子どもたちは目を直視して話すことができるようになった。……」

(2) クリントン大統領の‘呼びかけ’

1997年クリントン大統領は、‘クリントンの呼びかけ（President Clinton’s Call）’を全国民に訴えた。それは、

- ① 武器や暴力をなくす。 ② 規則を強化し、暴力に対応できる教員の養成を行う。
- ③ 学校は、制服を検討すべきである。制服を着用することは、暴力を防止し、規律を高め、よい学校環境を醸成する。
- ④ コミュニティは、怠学（不登校）法を整備、強化すべきである。
- ⑤ ゼロトレランス方式を確立すべきである。

以上のように、アメリカが生徒規律を建て直すことができたのは、父母の素朴な教育要求を採り上げ、大統領のリーダーシップのもとに、教育行政が伝統的教育への回帰を志向し、的確で実効の上がる規律指導法を推進してきたからである。

これらに関する詳細は、拙著『アメリカの事例から学ぶ学校再生の決めて—ゼロトレランスが学校を建て直した』（学事出版）を参照されたい。